

JET 青年を対象とした 日本語教師養成コースの設計と実施

阿部 洋子・長坂 水晶

1. はじめに

本稿は、筆者らが所属する国際交流基金日本語国際センター（以下、センター）で平成 16 年度に初めて実施された「全国 JET 日本語教授法研修」の概要とその成果について報告するものである。この研修は、将来日本語教師になることに関心を持つ JET プログラム参加者（以下、JET 青年）を対象としている。日本での体験を日本語教育の実践に生かす方法を考えられるようになることを目的に、ワークショップ形式で実施した。5 日間という短い期間で実施した日本語教師養成コースのコースデザインと、ワークショップ形式で進めた学習体験の効果を紹介することが本稿の目的である。

2. 全国 JET 日本語教師研修の概要

2.1 JET プログラムについて

JET プログラムとは、「語学指導等を行う外国青年招致事業 (The Japan Exchange and Teaching Program)」の略称で、日本と諸外国の相互理解の増進と地域の国際化の推進をはかることを目的としている。昭和 62 年以来、地方公共団体が主体となり、総務省、外務省、文部科学省、(財)自治体国際化協会 (CLAIR) の協力を得て実施されている。平成 18 年度は 44 カ国から 5508 人が JET プログラムで来日し、国際交流員 (CIR)、スポーツ国際交流員 (SEA)、外国語指導助手 (ALT) として日本各地で活躍している。

2.2 全国 JET 教授法研修の概要

2.2.1 研修実施に至る経緯と枠組み

本研修は日本語教育に関心を持つ JET 青年に対する教師養成の試みとして実施した。これは JET 青年が、CLAIR で実施している日本語講座「言語教育コース」¹に多数応募し、日本語教育に関心を示していることや、帰国後に日本語教師になる

ケースが多いこと、さらに、センターで実施している現職教師のための研修参加者の中にも JET 経験者が少なくないことに鑑みたものである。

研修は以下の枠組みで実施することが決められた。

目的：JET で得た経験を自国の日本語教育に生かす方法を自ら考えられるようになる

応募条件：

- ①日本語能力試験 2 級合格相当以上の日本語力を有する者
- ②将来日本語教師を希望する者、あるいは日本語教授経験がある者
- ③日本の所属機関から参加許可が得られる者

期間：2005 年 3 月 23 日～3 月 29 日（5 日間）

総授業時間：24 時間

募集人数：20 名

2.2.2 研修参加者概観

CLAIR の協力を得て各地方公共団体の JET 担当者などへの連絡、CLAIR ホームページ (HP)、センターHP などでも募集案内を行った結果、日本全国から 56 名の応募があった。申請書類と 2 種類の課題²に答えるレポートを審査して選抜した。審査基準は①将来自国で教える予定の有無や関心の強さ、②教授経験や外国語教授法研修受講経験、③研修の受講目標や希望の具体性、である。

審査の結果 20 名を選抜したが 1 名の辞退者があり、研修参加者は 19 名となった。ALT9 名、CIR10 名と、日本で外国語教育の現場に携わっているの方が少なかった。外国語教育に関する研修の受講経験者が半数で、日本語教授経験が全くない者が 1 名いた。外国語教授法に関する知識や経験にはばらつきが見られた。国籍は 9 カ国、赴任地は 17 県にわたり、参加者間に活発な意見や情報交換が期待できた（参加者の内訳は稿末資料参照）。

2.3 研修設計の方針

研修設計の方針を考える際、①研修目的「JETで得た経験を自国の日本語教育に生かす方法を自ら考えられるようになる」に即していること、②日本語教育に関する知識や経験の多少に大きく影響されないこと、③5日間という短い期間であること、を重視した。そして、「日本での体験によって得られた経験知（実践知）を客体化し、それらを教授活動に結びつける方法を体験できる場にする」ことを、具体的な研修内容を考えるための基本理念とした。さらに、「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加／体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル」（中野 2001：11）である参加体験型グループ学習、つまりワークショップ形式で研修を実践することにした。短い期間でも主体的な参加と参加者の多様性を生かした相互作用を促すことができると考えたからである。

2.4 研修内容

研修内容は、図のように段階ごとにねらいを設定し、授業科目を構成した。

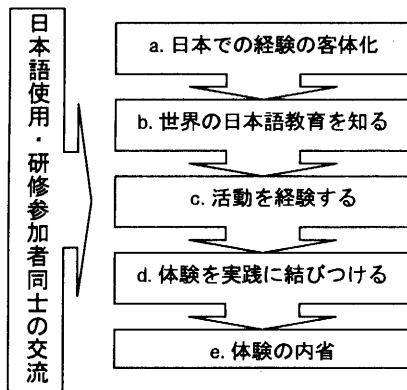


図1 研修の流れ

研修の流れに即して設定した授業科目の目的と活動、および授業時間を以下に紹介する。

1) 「任地紹介」(a.) 2時間

目的：日本での体験や知識の説明・共有化

活動：

- ・自分の勤める地域で見つけた面白い物を紹介する。
- ・それぞれの地域の特徴について気づいたことを話し合う

2) 「世界の日本語教育事情」(b.) 4時間

目的：自国の日本語教育について調べる・発表する

活動：

- ・世界の日本語教育事情を知る
- ・資料を使って自国の日本語教育事情について調べて発表する
- ・発表に必要な日本語を確認する

3) 「文化と教材・教室活動」(c.d.) 9時間

目的：

- ① 日本での経験や様々な素材を利用した活動を体験する
- ② 文化を取り入れた活動や教材を作成する

活動①：

- ・日本で手に入る情報や素材を利用した教材を知る
- ・文化を教材に取り入れる方法と意味を考える
- ・文化を取り入れた教室活動を体験する

活動②：

- ・グループで教材を作成する
- ・作成した教材を発表し、評価し合う

4) 「コンピュータと日本語教育」(c.d.) 7時間

目的：

- ① 海外でも入手可能なウェブサイトを利用した活動を体験する
- ② ウェブサイトを使った活動や教材を作成する

活動①：

- ・WebQuest（タスクを達成するために教師が選んだサイトを使って学習者が役割分担をして情報の収集をする）を体験する

活動②：

- ・グループで作成した WebQuest を発表し、評価し合う

5) 「研修の振り返り」(e.) 2時間

目的：研修を振り返り今後の抱負を確認する

活動：

- ・研修を終了した感想や今後の抱負を述べる
- ・事前課題と同じテーマの作文「帰国して日本語を教えるときに、JET プログラムに参加して得た経験をどのように生かしたいと思いますか」

3 研修の成果

参加体験型グループ学習を取り入れた研修の成果について、①参加者の意識変化、および②研修に対する評価から見ていく。

3.1 参加者の意識変化

研修を受けたことによる意識変化を見るために、事前課題と同じテーマで作文を書いてもらった。作文を比較したところ、意識変化として抽出され

たポイントは以下の4点にまとめられる。

- ①異文化体験の意味付け
- ②文化理解を促す指導法の獲得・意識化
- ③学習者に対する配慮
- ④JET 青年や研修参加者間のネットワーク

この4点がどのようなものであったかを、参加者の作文³から具体的に紹介する。

まず①異文化体験の意味付けは、日本での生活という異文化体験を、言語や文化理解学習に関連付けて意味のあるものとして捉え直しているものである。

参加者A

事前 JET プログラムに参加して得た経験は重要なことと思います。
事後 JET プログラムに参加して得た一番大事な経験は日本文化を実際に勉強したことです。(中略) 日本にいる毎日は色々なものから日本語を勉強することができます。

Aの事後作文には、具体例として買い物の際に使う単語や会話を例に挙げた記述が続く。日本での生活体験を学習だと位置付け、買い物などの日常の言語行動が学習につながっているという意識化ができてきている例である。

②文化理解を促す指導法の獲得・意識化は、研修の授業を通して得られた知識と方法論に関わるものである。

参加者B

事前 自分の文化体験から得た相互理解の知識を活用し、文化に合わせた適切な応用法を紹介したいと思う。
事後 日本で集めたちらし、メディア、日常生活用品等の生教材を使い、教室で学習者に直接に「見る、聞く、体験する」という学習環境を作りたいと思う。

Bの例は、教える素材が「相互理解の知識」という抽象的なものから、「ちらし、メディア、日常生活用品等」という具体的なものへと変わっている。また、教師が知識を与えるのではなく学習者が参加体験できる形態の指導法を取り入れようという意欲を述べている。Bが学習者として体験した授業形式を評価していることがわかる。

③学習者に対する配慮は、学習者を能動的・主体的な存在として捉えるようになったことを意味し、教師の役割を捉え直しているものである。Cの例は、事前作文で「自分が得た知識や経験を紹介したい」という教師側の視点だったものが、事後作文で「学

習者に興味を持たせるためには教師の知識や姿勢が重要だ」という記述になっている。これは対学習者意識が表れた例である。研修での学習者体験が、学習者側にとって教師の役割を考え直すきっかけになったと見ることができる。

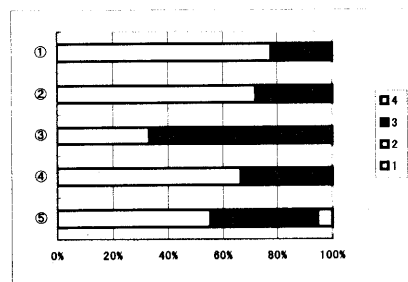
参加者C

事前 私が知った学んだ日本の伝統的な文化、ドラマ、音楽、ゲーム、日常生活などのさまざまなことを紹介したいと思います。
事後 学習者たちに日本そのもの文化、習慣、それから言語などに興味を持つようには、やはり、私、先生自身がどのぐらい日本のことを知っているか、また、どのぐらい日本のことに興味を持っているのかが、とても大事だと思います。

④JET 青年や研修参加者間のネットワークの存在とその有用性の意識化については、事前作文では2名からネットワークについて触れられている程度であったが、事後作文では「日本全国からこのセンターにやってきた他の外国人たちと一緒に会って、グループで話し合ったり協力したり何回も発表することができ、大変役に立ったと思います。(参加者D)」や「JETのネットワークを利用して今はやっていることを手早く手に入れることもできる(参加者E)」といった記述が見られた。JETのネットワークを積極的に活用しようという意識が明確に現れている。

3.2 研修に対する評価

研修に対する評価は、①文化とことばを関係付けて教えることに興味が高まったか、②文化とことばを関係付けて教えるアイデアや知識が増えたか、③教える意欲・自信が持てたか、④他の研修生との交流・協力ができたか、⑤研修に対する満足度の5項目について、4段階尺度法で回答を求めた。(図2)



結果は、「4.強く思う」と「3.思う」ではほとんど占められており、総じて高い評価を得ることができた。⑤研修の満足度に対して1名が「2.あまりそう思わない」と評価している。他の項目と比べ、③教える意欲・自信が持てたかに対する評価がやや低いのは、参加者の教授経験が非常に少ないためだと考えられる。5日間の研修では意欲は持てても自信を持つまでにはいかないからであろう。

4. まとめと今後の課題

本研修を総括すると、目的に即した研修が実現できたと言えるだろう。参加者に意識変化が生じ、満足度も高かったことから、内容と方法が参加者のニーズやレディネスにも合っていたと見ることができよう。

研修運営上の課題として、今回は他の参加者との交流・協力があまりできなかったと答えている人が1名だったが、参加体験型グループ学習に馴染めない参加者にどのような配慮が必要かを考える必要がある。さらに、この研修は新たな日本語教師養成を最終的な目標としているため、JETプログラムを終

えた参加者の帰国後の動向を探る必要がある。研修のフォローアップをどのようにするかが、今後の大きな課題として残っている。

注

1. 日本語教育に必要な基本的な知識の修得を目的とし、半年の通信講座及び5日間の集合研修を実施。
2. 課題1；帰国して日本語を教えるときに、JETプログラムに参加して得た経験をどのように生かしたいと思えますか（300～400字の作文）。課題2；センターのHPを参考にして、自国の日本語教育の特徴をA4用紙1枚にわかりやすくまとめる。
3. 作文は原文のままの抜粋である。

参考文献

- 池上摩希子（2002）「体験型学習の意味と方法」『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社，101-117。
鈴木克明（2002）『教材設計マニュアル 独学を支援するために』北大路出版
中野民夫（2001）『ワークショップー新しい学びと創造の場ー』岩波書店
財団法人自治体国際化協会パンフレット JAPAN 2005 CLAIR

あべ ようこ／国際交流基金日本語国際センター

Yoko_Abe@jpf.go.jp

ながさか みあき／国際交流基金日本語国際センター

Miaki_Nagasaka@jpf.go.jp

稿末資料

研修参加者概観

平均年齢：27.4歳（21～38歳） 性別：男性5名、女性14名

出身国：韓国3名、中国4名、タイ1名、オーストラリア2名、ニュージーランド2名、カナダ3名、米国2名、ブラジル1名、スロベニア1名

赴任地：青森県・秋田県・宮城県・福島県・新潟県・富山県・栃木県・埼玉県・愛知県・三重県・岡山県・島根県・愛媛県・福岡県・沖縄県—各1名、石川県・香川県—各2名

外国語教育研修受講経験者：10名

JET 青年向け通信講座「言語教育コース」受講者：2名

日本語を教える予定がある者：11名